

予期せぬオンライン教育の始まり

Unexpected beginning of online education



吉永美香*

今春、日本の多くの大学で COVID-19 の感染拡大防止のための全面的なオンライン講義が導入された。5月には、教員同士で顔を合わせると「授業、どうしてます？」が決まり文句だった。オンラインになったところでさほど困らない、もともとスライド中心で構成された座学科目もあれば、大学にある実験装置が使えないのならお手上げと、早々に後期振替を決めた実験科目もあるようだ。

オンライン講義の提供スタイルは、教科書とスライド資料のダウンロードのみ、というシンプルな方法に始まり、スライド資料に解説音声を加えた動画配信、講義の板書動画配信、Web 会議システムを使った一方向ストリーミング配信、Web 会議システムを使った双方向のインタラクティブ授業など多岐にわたり、講義回によってこれらを織り交ぜることもある。そもそも事前に予定されて導入が始まったわけではないので、対応の多くは現場に一任されており（丸投げともいう）、オンライン講義設計のかなりの部分は、教員の IT リテラシと熱意で決まってしまうようだ。

さて、筆者の所属する建築学科では、指定された設計条件の中で、建物の詳細を決め、最終的に図面やプレゼンテーションボードを完成させるという設計科目、またはそれらのスタートアップに相当する基礎演習科目が、全学年に配置されている。工学系研究者の筆者も、長年にわたり、一年生にデッサン・透視（パース）図法を教える科目を担当している。さあ困った！少なくとも動画は必須だ。手本を描く様子を、解説を喋りながら、ビデオに撮れば良いのでは、と早速試してみる。しかし、自分の頭が邪魔でカメラが斜めに入らざるを得ず、肝心の画が歪んでしまう。これではパースも何もあったものではない。タブレットとペンで自然な画を描くスキルはないし、何とかしてクロッキー帳に対しカメラを垂直にセットしなくては、手元にイーゼルはないし、三脚ではカメラを真下に向けて固定できない。実験室に余っている端材でカメラ台を手作りするか？いや、四成分長短波放射計のセンサ部にスマホを貼り付ける方が早いのか？・・・そんな試行錯誤の末、古め

かしい大型の書画カメラ（実物投影機）が固定設置されている教室まで出向き、カメラ部分にスマホを貼り付けるという方法で、無事、動画を撮影することができた。この後には初めての動画編集が待っており、ステイホーム・在宅勤務とは正反対の多忙な数週間だった。

幸い、私の努力が実ったか（そう思いたい）、この科目では履修生がしっかりついてきてくれ、例年と比較しても遜色ない作品が多数見られた。ひとまず胸をなで下ろしているところである。

一方、悩みはハード面だけではなく、やってみて分かったソフト面の問題もある。通常、オンライン学習では、孤独な環境で学修する学生の集中力をそがないように、要点やスキルを端的に与えることが期待される。平常時、一コマ 90 分の対面講義をしているからといって、90 分の動画をそのまま配信して同じ教育効果が得られるわけではないのだ。対面講義では、飽きてきたと感じたら、問題を解かせたり、雑談をしたりと学修意欲を維持できるような雰囲気チューニングが可能だが、オンライン講義では、そのような手法での興味・関心のキープが難しい。全体的な学習効率を考えると、講義内容そのものよりも、相手を吸収する姿勢にさせることの方が重要という持論を有する筆者としては、非常に悩ましい思いで毎週の講義資料を作成している。もちろん最初から意欲のある学生は、何度も講義を見られて助かると無邪気に評価してくれるが、少数派である。

とにもかくにも、この春、筆者を始めとする大学教員の多くが、図らずもオンライン教育の経験を得た。成功例も失敗例も、これから本学会がオンライン上で発信をしていく際の有用な知見になることは間違いない。また、情報のカオスとなっている現代において、発信した情報を受け取って、吸収し、行動に移してもらうためには、ソフト面についても作戦を立てなくてはならないと感じている。

*名城大学理工学部建築学科 教授